

啓成がくゆう会 第6回「人権講座」

令和7年9月10日(水)
午後1時30分～午後3時

「旅に唄あり、米子で生まれ育った岡本おさみさん」

本日は講師としてお招きいただきましてありがとうございます。
今日は、こんな順序でお話をさせていただきます。画面をみながら
お楽しみいただければ嬉しいです。
米子市生まれの岡本おさみさんが、日本のフォークソング誕生の中で
大きな貢献をされたこととお話しさせていただきます。
お話はこんな順序ですすめていきます。画面を見ながらお楽しみください。

1. 岡本おさみさんを語るかいの設立—自己紹介です
2. 吉田拓郎さんから、岡本おさみによせるメッセージ
3. 岡本おさみさんのプロフィール
4. 岡本おさみが育った、そのころの米子
5. 岡本おさみさんの作詞家としての歩み
6. 岡本おさみさんの「ことばの原点」
7. 全国に、そして地元語り継ぐ今年の企画
8. 特別企画「岡本おさみさんの原風景を巡るそぞろ歩き」

どうぞよろしく願いいたします。

本名 岡本修己(おかもとおさみ)

1942年、米子市糶町生まれ

米子市立啓成小学校卒、米子市立第一中学校(現東山中学校)卒、
鳥取県立米子東高校卒。その後、日本大学へ。

卒業後、放送作家から日本のフォークソング黎明期に作詞家として数々のアーティストに作品を提供して大きな影響力をもつ作詞家として活躍された。

主な作品は「襟裳岬」「旅の宿」「落陽」「祭りのあと」(吉田拓郎)

「こんな静かな夜」「満天の星」「愛する人へ」(南こうせつ)

「黒いカバン」(泉谷しげる)など400曲を超える作品を残された。

旅をしながら日本全国を放浪して作品を書き続けていった。

旅をして、何気ない街で人と出会い、その人の人生を感じ取りながら「ことば」を紡いでいった「放浪の作詞家」だった。

1970年代は高度経済成長の真っ最中で、大きな変化が起こり人々が二極化していく激しい時代だった。高度経済成長の時代に入り、生活や価値観が大きく変わりました。その中で段々時代に取り残されていく庶民の姿と心情を言葉にしていたのが岡本おさみさんを代表にフォークソングの歌だった。

1960年代の政治の時代に敗北していった若者の心を表現したものがフォークソングだった。

1974年、作詞 岡本おさみ、作曲 吉田拓郎、歌 森進一の「襟裳岬」で

日本レコード大賞、日本歌謡大賞受賞。

作詞家活動の一方、芝居の作詞と訳詞に参加され幅広い活躍をした。

地元の作品では「鳥取県わかとり国体歌」のほか、男性合唱組曲「隠岐四景」

(1980年に文化庁芸術祭優秀賞)。

組曲「野の鳥たちの歌」作曲 堀悦子 歌 山陰放送少年少女合唱団(文化庁芸術祭作品)がある。

1985年から米子市内で開催された「米子ワイワイ音楽漬け」の基本的な考えをアドバイスを受けて米子の街が音楽で3日間賑わった。

また、島根県の隠岐諸島をたびたび訪れ、「都万の秋」(吉田拓郎作曲・歌)が生まれた。

残念ながら、2015年11月30日心不全のため死去。享年73歳

啓成がくゆう会
第6回【人権講座】

と き: ~~令和7年9月10日(水)~~

天候不良のため

延期→令和7年10月10日(金)

午後1時30分～午後3時

ところ: 啓成公民館 2階 集会室

共催:

米子市中央隣保館

啓成地区人権・同和教育推進協議会

「旅に唄あり、米子で生まれ育った岡本おさみさん」

岡本おさみさんを語る会 会長

講師 長谷川 泰二 氏

〈講師さんから受講者みなさまへ〉

昭和の時代、米子が青春時代を迎えていた頃に岡本おさみさんは「米子市糶町」で生まれました。にぎやかな商店街、元気だった米子の町はどんな町だったのでしょうか。

私も岡本おさみさんと同じく啓成小・一中・東高を卒業して、あとを追うように東京に出ました。共通することがたくさんあります。人にやさしく、助けあって生きた米子の町が岡本おさみさんの心を育てたと思っています。そんな米子をご一緒に語りあえればありがたいです。よろしくお願いします。 長谷川 泰二 拝

(映像を使用する予定です)

〈講座内容〉

今年昭和100年を迎えます。戦後高度成長期の日本のフォークソングが生まれた背景に「日々の暮らしを唄う」大きな活力と影響力を与えた故・岡本おさみさん(米子市糶町出身)の歌詞力。森進一さんが歌われた大ヒット曲の「襟裳岬」の歌詞で「襟裳の春は何もない春です」のサビの部分は、襟裳に訪れた時に、大変寒く「何もないですがお茶でもいかがですか？」と民家に温かくもてなされたことに感動して作詞したものといいます。旅をしながら生活を見つめ人間を見つめてきた岡本おさみさんの歌詞足跡から、人権について見つめてみましょう。